

蠍の星 毒虫から
慈悲の星へ

小泉友美 Koizumi
Tomomi



目次

蠍の星	1
---------------	---

蠍の星

蠍の星 毒虫から慈悲の星へ 宮沢賢治作品より

蠍の星に何故、宮沢賢治はこうも惹かれるのでしょうか？

この星が夜明け前に見えるのは、真冬の一月頃で、アルファ星は赤い1等星のアンタレス。

蠍の星の心臓部分。

名前の由来は、戦の神である火星に対抗する者で、ギリシャ神話によると、巨人オリオン（美男子で力も強い狩人）を倒した蠍であり、天上の女神達がこのオリオンの傲慢さに腹を立てて、蠍を送り、オリオンを毒で倒しました。二人は天敵の仲であり、蠍の星が昇ると、オリオンの星が沈んでゆきます。

宮沢賢治の作品に、頻繁に出て来る蠍の星。

短編・童話集の“双子の星”（1918年執筆）は初期の童話で、天の河の西の岸の小さなお宮に住んでいる、双子の兄弟のお星様が、乱暴な大鳥（よだか）と蠍の喧嘩に巻き込まれてしまいます。

この作品内で、わがままな蠍と言われますが、後に改心して、良き蠍となります。

この蠍の星は非常に暴力的で、赤い眼を持ち、二つの鋏をゆらゆら動かして、暴い声で歌をうたっています。

"みなみの空の 赤眼の蠍

毒ある鉤（かぎ）と大きな鋏を

知らない者は 阿呆鳥"（蠍の星の歌）

この蠍の態度に、天敵関係の大鳥の星は、怒りに身を震わせる程、嫌っています。

蠍もまた、大鳥に嫌味をけしかけます。

"ああ、どうも喉が渴いてしまった。（…）はてな、どうもこの水は土臭いぞ。どこかの真っ黒な馬鹿アが頭をつっ込んだと見える。"

蠍は大鳥を馬鹿にする様に、毒の鉤のついた尾っぽをぱたぱた動かします。

すると、売られた喧嘩に買う喧嘩で、大鳥は羽をパッと開いて叫んで、

"こら蠍。貴様はさっきから阿呆鳥だのと俺の悪口を言ったな。早く謝ったらどうだ。"

蠍が水から頭を離すと、赤いその眼がまるで火が燃えるように動かしました。

遂に、蠍と大鳥は喧嘩して、蠍は頭に深い傷を受け、大鳥も胸を毒の鉤で刺されて、両方ウンとうなって気絶してしまいました。

その後、蠍は改心して、良き蠍となります。

蠍が暴力的で荒々しく描かれたのは、この双子の星一作のみであり、他には、詩作の蠍の星において、魔物と呼ばれます。

" 南天の 蠍よもしなれ 魔物ならば のちに血はとれ まず力欲し"
(南の空に、赤く妖しく輝く蠍の星よ。魔物は夏の終わりと共に空から消える。)

この魔物は忌まわしい怪物的な存在では無く、畏れさせる存在です。

大正 12 年の童話、“シグナルとシグナレス”の冒頭において、早朝の訪れを告げる星として描かれています。

" ガタンコガタンコ、シュウフッフ、蠍の赤眼が見えた頃、四時から今朝もやって来た。"

宮沢賢治は、蠍の星を歌の中によく登場させています。

" 銀河鉄道の夜"の中で、蠍は忌まわしき、暴力的な存在ではなく、利他のところと自己犠牲の愛を持った、いい虫として紹介されます。

蠍の星は、川の向こう岸を赤く輝やかせ、その黒い煙は高く桔梗色の冷たさそうな天をも焦がしそうで、ルビーよりも赤く透き通りリチウムよりも美しく酔ったようになってその火は燃えていました。

蠍の星の火は、自己犠牲の炎。

焼けて死に、その火が今でも燃えるといいます。

この火の由来は、

" 昔のバルドラの野原に一匹の蠍がいて、小さな虫やなんか殺して食べて生きていたんですって。

するとある日いたちに見つかって食べられそうになったんですって。

蠍は一生懸命逃げて逃げたけど、とうとういたちに押さえられそうになったわ。その時いきなり前に井戸があってその中に落ちてしまったわ、もうどうしてもあがれないで蠍は溺れはじめたのよ。その時蠍はこう云ってお祈りしたというの。

ああ、わたしはいままでいくつもの命をとったかわからない、そしてその私が今度いたちに捕られようとした時はあんなに一生懸命逃げた。

それでもとうとうこんなになってしまった。あんなにもあてにならない、どうしてわたしはわたしのからだを黙っていたちに呉れてやらなかったろう。

そしたらいたちも一日生きのびたろうに。

どうか神さま。私の心を御覧下さい。こんなにむなしく命を捨てずどうかこの次には誠の皆の幸のために私のからだをおつかい下さいって云ったというの。

そしたらいつか蠍はじぶんのからだが真っ赤なうつくしい火になって燃えてよるのやみを照らしているのを見たって。

いまでも燃えているって、お父さんおっしゃたわ。

ほんとうにあの火それだわ。"

ジョバンニとカムパネルラは、最後の夜行列車の旅で二人きりになった時、この蠍の自己犠牲の生き方に陶醉します。

"カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。

僕はもうあの蠍のようにほんとうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまわない。"

この蠍のエピソードは、宮沢賢治自身が熱烈に崇拝していた妙法蓮華經に影響されています。

大乘仏教の教えの菩薩行の1つで他者を敬う事が自分の修行につながる教えで、仏の慈悲がすべての衆先に対して分け隔てなく注がれる教えと、葉草喩品第五の慈悲の雨がまんべんなく、すべての草木に降り注ぐたとえより来ています。

いつ、どのように宮沢賢治が、毒虫とされる蠍に仏の慈悲を見たのか、夜空に赤く燃える星を追って瞑想したいものです。

完

2026年8月3日 フランス アンジェ Angers 平和 祈

蠍の星 毒虫から慈悲の星へ 宮沢賢治作品より

著 者 小泉友美 Koizumi Tomomi

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
